

村尾 哲哉氏の学位論文審査の要旨

論文題目

日本人の生活習慣の変化と胃食道逆流症との関連
(Relation between GERD and change of Japanese lifestyle)

胃食道逆流症 (gastro esophageal reflux disease, 以下 GERD) は、欧米諸国で頻繁に見られる疾患である。近年、日本でもガイドラインが策定され、疫学や治療に関する研究が進められているが、本疾患の関連因子についての詳細は明らかにされていない。本研究では、人間ドック受診者を対象として、GERD に関連する因子、特に、性差や生活習慣に関わる因子を明らかにし、それらの結果をもとに、GERD の予防や症状の改善に結びつく新たな治療戦略の考案を目的として実施された疫学研究である。

研究方法として、2004年7月から2005年3月までの間に、人間ドックを受診した2853名が対象である。症状調査として日本語版クエスト問診票の6点以上、または内視鏡所見により逆流性食道炎が認められる場合を GERD と定義している。さらに GERD と判断された対象者を、① 症状のない食道炎のみを認める群 (無症状食道炎群) ② 症状と食道炎との両者を認める群 (有症状食道炎群)、③ 食道炎はないが症状のみを認める群 (非びらん性逆流症群) の3群に分類し、関連因子を疫学的に解析している。解析の結果、GERD は667人 (23.4%) に認められ、そのうち、無症状食道炎群は232人 (8.1%)、有症状食道炎群は91人 (3.2%)、非びらん性逆流症群は344人 (12.1%)であった。正常者群と GERD 群との比較解析の結果、GERD に関連する因子として、BMI 高値、食道裂孔ヘルニアの存在、睡眠不足、緑茶を飲む習慣が挙げられた。また、無症状食道炎群、非びらん性逆流症群では、性差が有意な関連因子であった。男女別の解析結果では、男性において、有症状食道炎群で喫煙が、非びらん性逆流症群では睡眠不足、女性においては、非びらん性逆流症群で運動不足が関連要因として挙げられた。

審査では、対象集団の選択バイアス、GERD の分類に関する妥当性、研究結果の一般化妥当性、ピロリ菌感染症や下部食道括約筋の緊張性との関連性、胃の塩酸やペプシン分泌などに関する実験的データとの整合性、同じアジア諸国の先行研究との比較検討等の様々な質疑応答がなされ、申請者はおおむね適切に回答した。本研究は、十分なサンプル数を確保されたうえで実施され、無症状の人でも、GERD となりえること、生活習慣や性差が GERD に関連することを明らかにした。特に GERD を3群に分類し、男女別、症状・所見別に関連因子を明らかにしたことにより、具体的な生活習慣の改善方策の提言を可能とする成果が得られた。本研究は GERD の今後の臨床及び予防に寄与するところが多く、学位の授与に値すると評価した。

審査委員長 公衆衛生・医療科学担当教授

加藤 貴孝

審査結果

学位申請者： 村尾 哲哉

専攻分野： 消化器内科学

学位論文名： 日本人の生活習慣の変化と胃食道逆流症との関連
(Relation between GERD and change of Japanese lifestyle)

指導： 佐々木 裕 教授

判定結果：

㊦

不可

不可の場合：本学位論文での再審査

可

不可

平成 23 年 12 月 16 日

審査委員長

公衆衛生・医療科学担当教授

審査委員

消化器外科学担当教授

審査委員

病態情報解析学担当教授

審査委員

分子病理学担当教授

加藤 貴彦
馬場 秀夫
安東 由喜雄
山本 哲郎